

「国際的な情報発信のための e-learning による人材養成プログラム」に関する Learner Autonomy についての一考察

小林 貢

An Introduction to English Education Program of Akita National College of Technology:

On e-learning and writing exercises reconsidered by the concept of Learner Autonomy

Mitsugu KOBAYASHI

(平成21年11月27日受理)

It should be taken into consideration that e-learning and writing exercises by native speaker are the essential tacklings for the English Education of Akita National College of Technology. In addition to that, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology recommends students to deepen their learning of their special fields and to have the practical English ability, which EDC and Washington Accord also recognize necessary qualifications for learning.

The purpose of this paper is to suggest an approach to improve the spontaneous educational abilities (containing English ability) for our students by using e-learning and writing exercises based on the ways of thinking of Learner Autonomy, Finland Method, DeSeCo Key competency and JABEE.

We have been making many attempts to establish students' voluntary English learning and let them know the world-wide point of view for engineering design. If they keep studying their specialities autonomously and communicate with foreigners in English, they can contribute to the world as international engineers attributed to Learner Autonomy.

1. Learner Autonomy, Finland Method, DeSeCo Key competency における共通項

Learner Autonomyのためには、学習者本人が自らの意思で学習することにより、自らの人生の質を高めるための主体的な姿勢を持つ responsible learner たりえるか、否かが、成否の鍵となりえる前提であり、そのためには、情報を批判的に検討することも必要とされる。そして、Learner Autonomy を成功への導くためには Teacher Control が必要であり、具体的には、人的、物的な resource が必要である。それらに加えて、Learner Autonomy を上手く作用させるためには、Teacher と learner の間や learner 間の Communication が必要不可欠となる。このように Learner Autonomy においては、自らの知の主体的構築とそのための自己

学習能力が目標とされている。Learner Autonomy の概念は OECD が 15 歳の子供を対象として世界各国を対象として 3 年に 1 度行っている PISA (学力到達度調査) において毎回 (2000 年, 2003 年, 2006 年) に「数学的リテラシー」「読解力」「科学的リテラシー」で好成績を収めているフィンランドの Finland Method や EU における DeSeCo (コンピテンシー定義・選択計画) (最終報告書 2003 年) における Key competency と密接に関係すると考えられる。

具体的には、Finland Method は、「カルタ (マインドマップやメモリーツリーと同種)」による発想力、論理力、表現力、自らの思考に対しても客観的な「批判的思考力」に重点が置かれており、フィンランドの学校とは「知識の構成の方法論」を教える場なのである。

そして、DeSeCoにおけるKey competencyは以下の3点である。

Use tools interactively (e.g. language, technology)

Interact in heterogeneous groups

Act autonomously

これらのこと考察すると、Learner AutonomyとFinland MethodやDeSeCoのKey competencyの共通項としてCritical Thinking「批判的思考能力」やInteract「情報交換、交流」及びAutonomous Learningによる「自分自身の目標の選択や探求を確立するための主体的且つ省察的な思考と行動」が挙げられると考えられる。

2. Learner Autonomy と e-learning

上記の世界的な教育の潮流を考察して、筆者を中心とした秋田工業高等専門学校の人文学系（英語）はLearner Autonomyのresourceとしてのe-learningを推進するために平成21年度特別教育研究経費の申請を平成21年6月上旬に行った。以下はその内容である。尚、公表できない箇所は----とする。

平成21年度 特別教育研究経費所要額調
（国際性の向上・個表）

重点事項の順位 ----

高専番号：----

高専名：秋田工業高等専門学校

事業名 国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム

【概要】e-learningによる英語学習に加えて外国人による専門分野に関する講演会により、TOEICに十分対応できる国際的に活躍できる人材の養成を図る。そして、情報発信の推進のための外国人によるライティングのプログラム「情報発信のためのLesson」の演習を行うことで、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成する。

事業実施主体 秋田工業高等専門学校 人文学系（英語）

事業計画期間平成21年度～平成22年度（2年）

要求額平成21年度要求額 ---- 千円

（事業実施経費総額 ---- 千円）

2.1. 事業の必要性

【目的・目標】

e-learningによる英語学習に加えて外国人による専門分野に関する講演会により、TOEICに十分対応できる国際的に活躍できる人材の養成を図る。そして、情報発信の推進のための外国人によるライティングのプログラム「情報発信のためのLesson」の演習を行うことで、学生が国際学会等専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成する。

【必要性・緊急性】

本校において平成20年度におけるJABEE中間審査受審時のTOEIC400点相当をクリアできなかった専攻科2年の2名の学生に英語プレゼンテーションの指導、撮影を行い、修了認定資格を修得させたことから、更なるTOEIC対策及びライティングのプログラムの導入は緊急であり且つ必要不可欠である。また、将来的に学生が国際学会で専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成するためにも外国人による専門分野に関する講演会及び外国人によるライティングのプログラム「情報発信のためのLesson」導入は必要である。

【独創性・新規性等】

本校は平成11年度から平成19年度まで9年連続して実用英語技能検定 奨励賞に選考されたことに加えて、平成20年度団体優秀賞を受賞した。この実績が示すように、本校は英語教育において「大学受験」における英語科目の受験がないことに対しての補完として、「資格試験（英検、TOEIC）」を修得することを目標の一つとするアプローチを採用してきた。TOEICに関しても、本科では、ALC NetAcademy 2「初中級コースプラス」を活用した3年生の英語Ⅲの授業の一環として、3年生全学生を対象にして年1回IPテストを行っており、TOEICで大学平均点以上の優秀な成績を取めた学生に、学術奨励賞を授与している。また、英語力の向上を目的として、単位認定制度を設けている。専攻科では、ALC NetAcademy 2を活用したe-learningにより、TOEIC対応の演習を行っており、TOEICで大学院平均点以上の優秀な成績を取めた学生に、学術奨励賞を授与している。今回の事業はこのような「資格試験（英検、TOEIC）」の修得をゴールの一つとしている客観的な評価に基づく取り組みの延長上にあることに事業としての新規性があると考えられ、その目標達成のためe-learningと外国人による演習を効果的に関連させていることにも特徴があると考えられる。

2.2. 事業の取組内容

(中期目標及び中期計画との関連性)

【全体計画】

平成21年度において新TOEICテスト(2006年5月リニューアル)に対応したALC NetAcademy 2「スーパースタンドコース」と「ライティング基礎コース」を導入し、専攻科2年生の学生でTOEIC400点相当をクリアできていない学生及びTOEIC400点以上をクリアした学生で更なる得点アップを目指す学生の演習教材として活用する。平成22年度においてはALC NetAcademy 2「スーパースタンドコース」を専攻科2年生対象の「応用英語Ⅲ」で演習教材として活用する。また、ALC NetAcademy 2「ライティング基礎コース」を導入して、本科4年の総合英語Ⅰもしくは本科5年の総合英語Ⅱの授業において演習教材として活用する。もちろん、情報発信の推進のためにライティングのプログラムの使用を情報処理センターにおいて専攻科学生に許可することで、学生が国学会等で専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成することを可能にし、それによりTOEICスコアに対するシナジー効果を図る。これは本校の中期計画における1. 教育に関する目標を達成するための措置 6) 教育環境の整備 ウ) 情報処理センター、図書館、寮のパソコン室を整備し、学内のコンピューターネットワークを利用した自学自習用教材ソフト開発やe-Learningによる創造性教育に取り組む。」と軌を一にしている。また、外国人による専門分野に関する講演及び外国人によるライティングのプログラム「情報発信のためのLesson」の演習を行うことで、学生が国際学会等で専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成する。

【平成21年度に実施する事業内容】

上述したように、平成21年度においてALC NetAcademy 2「スーパースタンドコース」と「ライティング基礎コース」を導入し、専攻科2年生の学生でTOEIC400点相当をクリアできていない学生及びTOEIC400点以上をクリアした学生で更なる得点アップを目指す学生の演習教材として活用する。そして、本科4年以上の学生には自由に活用できるe-learning教材として情報処理センターでの使用許可する。それに加えて、外国人(国際教養大学教員を予定)によるライティングのプログラム「情報発信のためのLesson」を実施する。

2.3. 事業の実現に向けた実施体制等

【実施体制】

校長を中心とした全学的なバックアップを得た後、本校の人文科学系(英語)が実施する。

【工夫改善の状況】

TOEICに関しては、本校においては既に、ALC NetAcademy 2「初中級コースプラス」を授業に導入しているが、教育教材の更なる改善が望まれる状況である。e-learningに加えて外国人による専門分野に関する講演会及び外国人によるライティングのプログラム「情報発信のためのLesson」を行うことより、TOEICスコアの平均点向上及び英語における情報発信能力の向上を目指す。

2.4. 事業達成による波及効果等(学問的効果, 社会的効果, 改善効果等)

学問的な効果に関しては、e-learningによる英語学習により、TOEICスコアが向上することで、英語を使用する事象に対して十分対応できることで、国際的に活躍できる人材を養成できるようになり、情報発信の推進のためにライティングのプログラムの演習を行うことで、学生が国際学会等専門に関する発表を出来るようになるならば、その過程自体がe-learningによる英語学習の有効を証明すると考えられる。また、そのような結果となれば、英語における教科教育法的にも評価されると考えられる。また、社会的効果としては、秋田県において英語のe-learning(具体的にはALC NetAcademy 2)を導入しているのは、秋田大学と本校だけであり、本校のTOEICに対する取組みは、「秋田魁新報」紙面において取り上げられたことがある(平成18年4月26日夕刊)。正に、本校の取組みは社会からも注目されており、更に本校のe-learningを充実させることは本校に対する社会的な認知を高めることと密接に関係すると考えられる。次に、改善効果に関しては本校において平成20年度におけるJABEE中間審査受審時のTOEIC400点相当をクリアできなかった専攻科2年の2名の学生に英語プレゼンテーションの指導、撮影を行い、修了認定資格を修得させたが、この導入により、TOEICスコアが向上することが予想されるので、将来的に学生が全員TOEICスコア400点相当をクリアできる可能性が高くなることが想定される。また、外国人による専門分野に関する講演会及び外国人によるライティングのプログラム「情報発信のためのLesson」の導入により将来的に学生が国際学会で専門に関する発表をできるための英語力の素地を養成することが想定される。

3. 国際性の向上に関する改革推進事業」における「情報発信のためのLesson」

『国立高専だより vol.7』の6ページに記されているように、秋田高専：「国際的な情報発信のためのe-learningによる人材養成プログラム」は、高専機構の特別教育研究経費における10テーマの1つに選定された。(平成21年7月下旬に確定した。)

標記のプログラムにおける外国人によるライティングのプログラム「情報発信のためのLesson」を実施するために、平成21年8月25日(火)午後、本校の専攻科長と筆者は国際教養大学を訪問し、同校の教職員と交流を行った。シラバス等の関連書類を頂き、熟読した後、国際教養大学の英語集中プログラム(EAP)の代表教員に「情報発信のためのLesson」について、平成21年9月4日付で依頼を行った。以下は平成21年9月4日付依頼の内容である。尚、公表できない箇所は、----とする。

3.1. 「情報発信のためのLesson」依頼文

Mitsugu Kobayashi

Associate Professor, Institute of Human Science
AKITA NATIONAL COLLEGE OF TECHNOLOGY
Address: 1-1 Bunkyo-cho Iijima, akita, 011-8511,
JAPAN

Phone: +81-18-847 ----

E-mail: ----@akita-nct.jp

September 4, 2009

Dr. -----

Director of EAP

Akita International University

Dear Dr. -----

Subject: The request for sending a native English teacher to our school

My name is Mitsugu Kobayashi, Associate Professor of Institute of Human Science of AKITA NATIONAL COLLEGE OF TECHNOLOGY. We are planning to hold five-day English writing program named "Lesson for dispatching information in English" by native English teacher at AKITA NATIONAL COLLEGE OF TECHNOLOGY in March, 2010.

We are looking for native English teacher with

profound learning, because those who, attending the English writing program, would like to present their studies at the international conference in the near future. The joining students of this program are estimated approximately 15.

We have ample knowledge of your university, and set high value on your EAP.

In addition to that, we like your school very much since we went for a study tour about your school on August 25. Assistant Professor of your school, Ms. ---- guided us kindly and let us know your E-mail address. She also introduced us to Ms. ----, staff member of your school.

The lesson of this writing program (100 minutes each day) must be taught by native English teacher and we have no full-time native English teaching staff. We understood your school very much by reading your syllabus and your book "International Community Exchange Activities".

The primary mission of this program is to motivate students to write English essays, which help to present their researches in the international conference.

In conclusion, we have respect for your EAP of AIU, therefore please send us a native English teacher. The five-successive-day term will be scheduled from March 8 to March 12, or, March 15 to March 19.

The honorarium (per 100 minutes each day), including the cost of transportation to come to AKITA NATIONAL COLLEGE OF TECHNOLOGY, is about ----- yen per day.

So, the five-day total of honorarium, including the cost of transportation, is estimated about ----- yen.

We look forward to hearing from you soon.

Very truly yours,

Mitsugu Kobayashi

上記の依頼に基づく、度重なる交渉(文書による交渉に加えて、平成21年10月20日(火)午後においても、本校の専攻科長と筆者は国際教養大学のEAP代表教員に表敬訪問を行った。)と学内の調整を経て、下記の事項が予定されている。

3.3. 「情報発信のための Lesson」 実施計画

標記は、平成21年度特別教育研究経費（高等専門学校改革推進経費）事業区分「国際性の向上に関する改革推進経費」における人文科学系（英語）からの採択事業名「国際的な情報発信のための e-learning による人材養成プログラム」における「情報発信の推進のための外国人講師によるライティングのプログラム」（平成21年度配分金額 ----- 円）であり、以下の通りに実施する計画である。

a. 実施期間

平成22年（2010年）3月15日（月）から3月19日（金）まで（5日間）

b. 実施時間

午前10時より午前11時40分（100分）

c. 実施場所

テクノ・コミュニティ

d. 講師

国際教養大学 英語集中プログラム（EAP）

Dr. ----

e. 対象学生

専攻科進学予定の本科5年の学生及び専攻科の学生で、TOEIC Cスコア400点以上から選出された15名以内の学生。上記の学生は事前に英文サンプルを提出する。

f. 謝金

規定の時給に基づく謝金及び規定の交通費を上記配分金額から支出の予定。

4. 「国際的な情報発信のための e-learning による人材養成プログラム」実施予定についての報告

筆者は平成21年10月7日（水）午後における本校の第6回教員会議、第7回専攻科教員会議において「国際的な情報発信のための e-learning による人材養成プログラム」実施予定についての報告を行った。以下はその内容である。

『英語の小林（筆者）でございます。「国際的な情報発信のための e-learning による人材養成プログラム」についてご説明させていただきます。』

このプログラムの内容は、平成21年度におきましては、12月中に e-learning ソフトとして ALC NetAcademy 2 の新 TOEIC テスト対策ソフト「スーパースタンドコース」及びライティングソフト「ライティング基礎コース」を導入することで学生に自主学習の機会を設けます。また、来年3月中旬に情報発信の推進のために国際教養大学のネイティ

ブの教員によるライティングプログラム「情報発信のための Lesson」を実施する予定でございます。これは TOEIC スコア400点以上で、学校長推薦選抜合格者を含めた、専攻科に係る15名以内の学生を対象とした特別講義でございます。

平成22年度におきましては、先に述べました e-learning ソフトを本科と専攻科の講義に導入し演習を行うことに加えて、理系論文攻略のための e-learning ソフトである ALC NetAcademy 2 の「技術英語パワーアップコース」を導入する予定でございます。

また、ネイティブの教員による、専門分野に関する講演会の実施を予定することで、学生が国際学会等で発表できるための英語力の素地を養成することを目指します。

このプログラムを英語教育の観点から3点にまとめますと、1つには e-learning を推進し、2つには、他の高等教育機関との交流を進め、3つには、JABEE 基準である TOEIC スコア400点をクリアした学生に対して情報発信の目標を掲げた少人数教育を実施することにより、国際的に活躍できる人材の養成を図るということでございます。宜しくお願い致します。以上です。』

5. 「情報発信のための Lesson」と Learner Autonomy

1980年代以降における教育の流れとして、「成果主義教育」が存在し、それは、基準テストに基づいた学生の達成度の結果により、教員が結果責任を問われることを原則とした教育政策で、アメリカを中心とした英語圏諸国からのグローバルな教育改革の傾向であった。これは、Teacher Control による典型的な教員からのアプローチによる、基準テストを中心とした評価に基づく教育である。しかしながら、最近のフィンランドにおける PISA の結果から注目を浴びた Finland Method や OECD の「学習者の学ぶ意思を重視する」Learner Autonomy 的な視座が再評価されている。これは、Teacher Control 重視から Learner Autonomy 重視へのヨーロッパ的な視座に基づく、教育的なアプローチのコペルニクスの転回であると考えられる。

このような状況の中で日本は、基準テストに基づいた Teacher Control 重視のグローバルな教育改革に逆らい、Interactive 且つ Learner Autonomy 的な「ゆとり教育」に取り組んだものの、2000年頃からの「学力低下」の原因は「ゆとり教育」に内在する

という批判から、「ゆとり教育」は頓挫した。そして、日本の教育はTeacher Controlによる典型的な教員からのアプローチと基準評価を重視する教育へと回帰したのである。

このような状況において、「情報発信のためのLesson」はLearner Autonomyをどのように進めるべきであろうか。学生の自主性を尊重し、基準テストに囚われないLearner Autonomyを推進するためには、逆説的に基準テストを最低限の指標として活用し、それをクリアした意欲的な学生を対象として、Learner Autonomyに基づく特別講義や自主学習を実施するということが、筆者の見解である。

つまり、Learner Autonomyに基づく特別講義である「情報発信のためのLesson」の受講を希望する学生は、基準テストであるTOEICにおいて、最低限の指標であるスコア400点をクリアしていなければならない。更に「情報発信のためのLesson」を受講を希望する学生は、自らの人生の質を高めるための主体的な姿勢を持つresponsible learnerとしての姿勢を示すために、事前に60分の時間で作成した「Why should we study English?」の英文サンプルを担当教員に提出する必要があるのである。これにより、Learner Autonomyに適應できる学生に対して、ネイティブの講師による英語のみの5日間のライティングのプログラム「情報発信のためのLesson」は実施されるのである。

このようなアプローチはもちろん平成21年度における自主学習にも当てはまり、TOEICにおいて最低限の指標であるスコア400点をクリアした学生には、更なる高得点を目指すために、ALC NetAcademy 2「スーパースタンドコース」を自由に活用できるe-learning教材として情報処理センターでの自主学習を勧める。

これらの取り組み関しての結果報告については、またの機会とするが、「学生自身が、自身の目標の選択や探求を明確するために主体的且つ省察的に思考行動し、他者とのInteractiveな関係性に基づき、知識の構成と更新の方法論を確立すること」を導くことを目的とした教育観が、評価されてきている昨今においては、教員もそれに対応するためにInteractively且つautonomouslyに何ができるかを

考察し、行動することが、今後の日本の教育においても必要とされていると考えられるのである。

参考文献

- Pasi Sahlberg, Education Policies for Raising Student Learning: The Finnish Approach, *Journal of Education Policy*, Vol22, No.2, 2007.
- Autonomy and Independence in Language Learning edited by Phil Benson and Peter Voller, Longman, 1997.
- THE DEFINITION AND SELECTION OF KEY COMPETENCIES Executive Summary, deseco.admin.ch/bfs/deseco/en/.../2005.dskcexecutivesummary.en.pdf
- <http://www.learnerautonomy.org/>
- <http://www.bun-eido.co.jp/ASTE.html>
- 福田誠治 「フィンランドは教師の育て方がすごい」株式会社亜紀書房, (2009.3)
- 小林 貢 「秋田高専における英語教育とJABEE, e-learning, ESP, EGP」秋田工業高等専門学校研究紀要 第44号, pp.100-106. (2009.2)
- 小林 貢 「英語教育とe-learning『秋田工業高等専門学校における実践的英語 コミュニケーション能力の育成のための取り組み』」ALC NetAcademy 通信 No.48 (2008.5.28)
- 小林 貢 「秋田高専における教養教育と英語教育に関する一考察」秋田工業高等専門学校研究紀要 第39号, pp.124-130. (2004.2)
- 小林 貢 他 「Students-Centeredness と CAI」平成14年度情報処理教育研究集会講演論文集, pp. 633-636. (2002.10)
- 小林 貢 他 「Autonomous Learning (自律的学習) とCALL」—英語を母国語とする外国人学生とのE-mailによる英作文学習の可能性— 情報処理教育研究発表会論文集, 第22号, pp.119-122. (2002.8)
- 小林 貢 「国立高専秋田における英語教育の現状と課題」—低学年における英語教育に焦点を当てて— 論文集 高専教育, 第24号, pp.187-192. (2002.3)